

市民科学

第16号

通算第28号



発行：NPO法人市民科学研究室 (Citizen Science Initiative Japan)
〒113-0033 東京都文京区本郷 6-18-1
Tel&Fax: 03-3816-0574
e-mail : info@csij.org

<http://www.csij.org/>
毎月1回発行
無料(サイトからもダウンロードできます)
編集責任者：上田昌文

【巻頭言】

死に至る科学

吉澤 剛 (市民科学研究室理事)

巻頭から気を重くさせるようなことは差し控えたいのだが、避けて通れない話題がある。自殺である。平成19年版自殺対策白書を見ると、自殺者数は過去10年ほど3万人前後と高い値で推移している。原因の半数を健康問題が占め、経済・生活問題、家庭問題と続く。平成9年から10年にかけて自殺者数が急増した理由は、「人口増と高齢化の進展に加え、当時の社会経済的変動が働き盛りの世代の男性に対し強く影響し、これらの世代の自殺死亡率が急増するとともに、社会経済の変動に影響されやすい昭和一桁～15年生まれの高齢者層の自殺死亡率が増加し、これらの効果が相まって自殺者数が急増したものと推測される」。失業率と自殺死亡率に明確な相関関係が見られ、不景気という環境要因の影響が特定の時代に生まれ育った人々の間に非常に強く作用し、ある種の世代効果が観察されるという。

なぜこの話をしているかという、こうした環境要因や個々の自殺要因の分析もせずに、手段ばかりを強調する自殺報道のあり方を問題とするためである。ここでは一度しかその言葉を使わないが、硫化水素を用いた自殺のことを指す。この物質は温泉街を始め自然界の様々な状況で発生しているが、汚泥などの攪拌や化学反応によって急激に高濃度のガスが空気中に発散されることがある。現在問題となっているのは、良く知られている日用品を混ぜ合わせることによって高濃度なガスが発生するという情報が広まり、これが原因による自殺が急増していることである。この4月だけで30件もの自殺が確認されている。さらに問題なのは、この手法による自殺が急増しているという報道が頻繁になされているということである。新聞やテレビはインターネットにこの自殺の詳しい方法が載せられていることを問題視するが、これでは逆効果でしかない。確かに、発端はこの方法で行われた自殺がインターネット上で議論され、簡易な自殺法としてネットの各所で広められたことにある。だが、これをマスメディアが取り上げ、インターネットに情報があることを示し、この方法による自殺の報道を繰り返すことは、自殺抑止とは逆の方向に情報を与えているだけである。気軽に連鎖という表現を用いることに慎重でなければならないが、チューリップ切断にせよ、連鎖を思わせる、あるいは連鎖を煽るような報道の仕方が改められなければならない。もちろんインターネットの罪も小さくない。この自殺法の詳しい情報が広められているばかりでなく、ネット上の匿名掲示板で自殺教唆に近いような煽りを受けて自殺に突っ走ってしまうということもある。

表はWHOによる『自殺予防：メディア関係者のための手引き』(2000)の抜粋である。まず、自殺手段の詳細な報道をしないようにすることが一番大きい。ひところは別の手段による集団自殺がメディアで多く取り上げられていたことも記憶に新しい。また、「ひと呼吸で死に至る危険性がある」といった報道をすることは、自殺を考えている人

の背中を押す情報にしかならない。求められるのはある程度痛みを伴った情報ではないだろうか。たとえば、この手段による自殺で未遂に終わった事例もきちんと報道し、安易に自殺できる手段でないことや後遺症のおそれを淡々と説明する。この手段による自殺では、表情は歪み、死体は緑に変色するという。死体を見せることはしないまでも、死の状況を説明し、軽い生理的嫌悪感を与えることも必要かもしれない。考えれば、集団自殺を美化させるような「心中」という言葉も使い続ける理由がない。「無理心中」にいたっては日本語としておかしいばかりでなく、殺人さえ正当化しかねない表現である。

報道は「周囲に迷惑がかかるから」として自殺を思いとどまらせるような、生きている人に対する論理ばかりで、死にゆく人に対する論理がないのだと思う。社会的リンク論を思い出す。魚を切り身として食べる生活は、人間はこの自然環境の中で、生物の死の上に自らの生命が成り立っているというつながりを忘れさせる。死から目を背け、なるべく離れたところにいようとする近代的な生き方が、逆に死に近いところに向かっていくという皮肉を見つめ続けなければならない。そうしないと「人を殺せば死刑になると思った」という言葉を発した人間と、その人間を生んだこの社会を理解することは到底できないだろう。

何をするべきか

- 事実の公表に際しては、保健専門家と密接に連動すること。
- 自殺は「既遂」と言及すること。「成功」とは言わない。
- 直接関係のあるデータのみ取り上げ、それを第1面ではなく中ほどのページの中でとりあげること。
- 自殺以外の問題解決のための選択肢を強調すること。
- 支援組織の連絡先や地域の社会資源について情報提供をすること。
- 危険を示す指標と警告信号を公表すること。

してはいけないこと

- 写真や遺書を公表しないこと。
- 使われた自殺手段の特異的で詳細な部分については報道をしないこと。
- 自殺に単純な理由を付与しないこと。
- 自殺を美化したり、扇情的に取り上げたりしないこと。
- 宗教的、あるいは文化的な固定観念をステレオタイプに用いないこと。
- 責任の所在を割り付けたりしないこと。

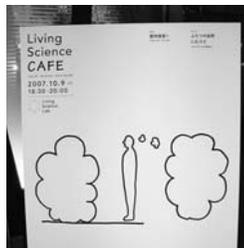
リビングサイエンスカフェ Vol.02

「ふたつの自然にむけて～リビングワールドの仕事から」

講師：西村佳哲 (にしむら・よしあき) / プランニング・ディレクター
ファシリテーター：上田昌文 (NPO法人市民科学研究室 代表)
2007年10月9日 (火) 18:30～ スワンカフェ&ベーカリー赤坂店にて



私は30歳くらいまで鹿島建設で働き、そこを辞めてから自分なりの仕事をいろいろ重ねてきています。ご紹介いただいた『自分の仕事をつくる』という本は、私が30歳のときに行ったいろんなインタビューの仕事でした。私が辞めたのは非常に大きな会社でしたから、大組織での仕事、ゼネコンの仕事の仕方しか知らなくて、個人でやっていくすべを知らないことに気づき、どうすればいいのか考えました。ひと味違う成果を



出しているところは、必ずやり方から違うんだろうな、と思っていました。そういう意味で自分が尊敬している人たち、柳宗理さん、アウトドアウェアのパタゴニアという会社、東急ハンズのロゴマークやINDIVIやUNTITLEをやっている八木 保さん等を訪ねて、「あなたはどんな働き方をしているんですか?」と質問して回りました。「働き方っていっても・・・働いてるよ」みたいな感じで、すごく答えにくい質問だったと思うんですが、答えにくいときは、「スタッフとの食事はどういうふうに行っているんですか」「残業のときの食事はどういうふうにとっているんですか」とか、具体的にいろいろ聞きほじって、まとめたのが38歳ごろです。今日はこの本の話にはあまり立ち寄らず、それと同時進行で私が手がけてきた仕事のうち3つくらいをご覧にしたいと思います。

【→続きはホームページへ】



【書評】『食料の世界地図』

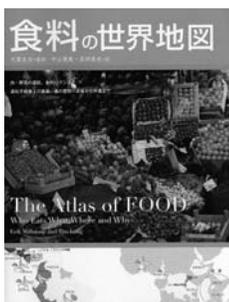
塩出浩和 (城西国際大学・中国近代史)

最初に手にとって、これはいい本だなあ、と感じた。読み進めるうちに、少し残念な本であることがわかった。だが、読み終えて、やはり必読の好著であると確信した。

食糧の問題が日本を、そして世界を賑わわせている。最近の話題でいうと、「毒入り餃子」・「爆食中国による高級食材の買占め」・「エタノール増産による穀物価格の上昇」などであろうか。これらの問題の後ろ側にひそむ食糧生産・流通の根本的問題について、豊富でカラフルな図表と簡潔でわかりやすい文章によって、「眼から鱗が落ちるように」わからせてくれるのが本書である。

たとえば、第26章の「フード・マイレージ」を読むと、毒入り餃子問題の本質は、「中国の食品加工工場の劣悪な衛生管理体制」や「一部の中国人が持っている強烈な反日感情」というよりも「食料の長距離輸送にともなう距離と時間に比例して増加する一般的リスク」であると考えたほうがわかりやすいということが理解できる。

【→続きはホームページへ】



エリック・ミルストーン (Erik Millstone)、
ティム・ラング (Tim Lang) 著、大賀圭治
監訳、中山里実、高田直哉訳
『食料の世界地図』
東京：丸善株式会社2005年
The of Food, Brighton,
UK: Myriad Editions, 2003

「子どもと携帯電話」の気がかりな話

上田昌文 (市民科学研究室)

携帯電話は20世紀の末に登場し、瞬く間に社会に浸透しました。日本では2007年5月の時点で、契約者数は1億人を突破し(携帯電話97,580,300+PHS 5,028,200 =1億260万8500件)、今では9割の世帯が所有していることとなります。これほど短期間にあらゆる人々が買い求めるようになった技術もめずらしいでしょう。

エネルギーや物質の面でみたときに私たちの社会を「石油依存社会」と呼ぶことができるのなら、携帯電話なしにはもう生活が成り立たないと思えるほどの普及率に達した今の社会を「携帯電話依存社会」と呼んでも差し支えないと思われます。携帯電話は、その便利さを誰もが享受するようになった反面、いくつものやっかいな問題を引き起こしていることも見逃すわけにはいきません。

一つは、携帯電話のマイクロ波を曝露することで生じる健康への悪影響に対する不安です(これに加えて、このマイクロ波がもたらす電子機器への誤差動の問題も指摘しなければなりません)。

【→続きはホームページへ】

症例対照研究の手法の原理

	患者 (症例群)	非患者 (対照群)
通常使用 (暴露群)	a 人	b 人
通常以下の使用 (非暴露群)	c 人	d 人
	a/c	b/d

a/c が b/d に比べて (つまり a/c > b/d の値が)

- 1より大きい：患者の方に「通常使用」の割合が高い
= その病気は「通常使用」のせいだ
- 1より小さい：非患者の方に「通常使用」の割合が高い
= その病気は「通常使用」のせいではない

中古民家主義への誘い

眞鍋じゅんこ (フリーライター)



そういえば普通の景色の中にある普通の家の中身を、私たちは余り知らない。たとえば私たちは普段、何の気なしに洋品店で服を買う。でもその独特な店構えの仕組みがあることには気付いてはいない。銭湯のボイラー室は？ 家族はどこに住んでいるのだろうか？何で古い柔道場は接骨院と一緒にあるのだろうか？ 疑問は次々に湧き起こる。

確かに全国各地の郷土資料館などが管理する「内部見学可能な古民家」は、あるにはある。でも生活は見えない。築 100 年経ってもびくと

もしない立派な庄屋敷や豪商の邸宅は、今流行の「古民家」としてもてはやされ、重要文化財の指定を受けて後世に残される。だけど私等が馴染みの普通の家や古びた木賃アパートだって、立派に「東京暮らしの歴史」の一員ではないか。それなのにただぶっ壊されるのを待つばかりとは忍びない。そこで我々はそれらを「中古民家」と勝手に名付け、探っていこうということになった。

東京の住まいは江戸時代を今なお引きずっていた。

その前に少し基礎知識を学ばねばなるまい。東京の民家の歴史をおさらいしておこう。

「ところで『民家』って何?」。いきなり立ち止まってしまった。別に建築家でも何でも無い私たちは、まずそんな根源的な疑問を解くことから始めなければならない。

【→続きはホームページへ】



【書評】『封印されたヒロシマ・ナガサキ 米核実験と民間防衛計画』 瀬川嘉之 (市民科学研究室 低線量被曝勉強会)

今年(2008年)4月8日、新聞各紙が次のような小さなニュース記事を報道した。『読売新聞 夕刊』から全文を引用する。

「『第五福竜丸』の話題に
天皇、皇后両陛下は8日午前、皇居・宮殿で訪日中のマーシャル諸島共和国のリトクワ・トメイン大統領夫妻と会見された。
宮内庁によると、1954年3月にマーシャル諸島のビキニ環礁で行われた米国の水爆実験で被ばくした「第五福竜丸」の話題になり、天皇陛下は「核兵器というのは放射能を持っているので通常の兵器よりも影響が長く続く。広く、長く記憶されていく必要がある」と話されたという。」

この記事を読んで、「天皇陛下」は核兵器の放射能が持つ意味についてはよくご存知なのだった。しかし、彼はほんとうに放射能の恐ろしさを知っているだろうか。広島・長崎の原子爆弾やビキニをはじめとする核実験に関して、米国の国立公文書館や米軍病理学研究所に埋もれ隠された史料を探求し、核兵器のはらむ歴史的、社会的問題性を提起されている高橋博子氏による新著でも、核兵器の持つ放射能に対する認識がテーマになっている。この記事で話題になっているまさにその 1954 年ビキニにおける大量殺戮破壊兵器の水爆実験の前と後、核兵器の放射能に関する米国政府の公式見解がどう変わったか、あるいは変わらなかったか、そのことの持つ意味を深く問いかける書である。

【→続きはホームページへ】



高橋博子『封印されたヒロシマ・ナガサキ 米核実験と民間防衛計画』
凱風社2008年

【書評】『科学力のためにできること 科学教育の危機を救ったレオン・レーダーマン』 西尾信一 (埼玉県立本庄高等学校)

本書は 2002 年に米国で出版された SCIENCE LITERACY FOR THE TWENTY-FIRST CENTURY の邦訳で、副題にある Leon Max Lederman は 1922 年生まれのノーベル賞受賞者で、科学教育振興に大きな功績のある人物である。米国科学アカデミー会長、全米科学教育研究連合元会長、宇宙飛行士、元米国科学財団長官、全米科学教育スタンダード開発者、元全米科学振興協会会長、ノーベル賞受賞者、「科学リテラシー事典」著者、大学学長、大統領科学技術諮問委員など錚々たる 23 名の専門家が Lederman の 80 歳を祝って寄せたエッセイを集めたトリビュート・アンソロジーが本書であり、巻末には 6 ページにまとめた彼の略伝もある。ただし、エッセイの中には、とくに Lederman やその業績には触れず、科学リテラシーに関わる自らの論考を述べただけのものも含まれている。

これだけ多数の論客が文を寄せているので、テーマは多岐にわたるし、必ずしも整合しない意見も垣間見える。したがって、Lederman の業績に関して本書に書かれていないことも含めて若干解説をし、あとは評者の印象に残った記述をいくつかの視点で抜き出してコメントすることにした。

【→続きはホームページへ】



監訳: 渡辺 政隆 翻訳: 野中 香方子
『科学力のためにできること 科学教育の危機を救ったレオン・レーダーマン』
近代科学社2008年3月

INFORMATION

第26回市民科学講座 インターネットのセキュリティとプライバシー

インターネットを安全に使う正しい方法のことはあまりよく知られていません。世間では「ウイルス対策ソフトを買え」などよく言われますが、こうした言説の一部には、商業主義によって歪められた嘘が紛れ込んでいることがあります。

この講演では、そうした嘘を暴き、本来の正しい使い方を示すとともに、情報セキュリティ啓発のあり方について議論します。

もうひとつはプライバシーの話題です。「ユビキタス社会」の到来などと言われるように、情報技術の発達により、固有 ID による物や人の自動識別が行われ始めようとしています。この講演では、IC カードや無線 LAN でプライバシーが損なわれる事例を紹介し、プライバシーを損ねない技術のあり方について議論します。

高木氏はご自身のブログ「高木浩光@自宅の日記」で、ネット社会におけるセキュリティの脆弱性の問題を具体的に詳細に論じ、様々な提言をなされておられます。この講座は、ネット社会に生きる私たちが心得ておかねばならないことを深く知る、貴重な機会になると思います。

日時: **5月21日(水) 18:30~21:00** (18時開場)

場所: アカデミー文京・学習室 (文京シビックセンター地下1階)
(地下鉄「春日」駅、「後楽園」駅すぐそば)

講師: **高木浩光さん** (独)産業技術総合研究所・
情報セキュリティ研究センター主任研究員)

参加費: 1,000円

<参考サイト> 高木さんのブログ
<http://takagi-hiromitsu.jp/diary/>

会計の事務アルバイト(1名)を募集しています

会計と名簿管理を中心にした仕事で、週2回(10時間から12時間ほど)の勤務です。事務所(文京区本郷)からあまり遠くない方を希望しています。ワードやエクセルが扱えることが必要です。学生さんでもかまいません。時給は、経験と能力に応じて、1200円までの枠で決めさせていただきます。曜日(月土日を除く)、時間帯は希望に応じます。この仕事に相応しい方をご紹介いただけて、その方が採用された場合は、ご紹介くださった方に謝礼10000円を差し上げます。

「子ども料理科学教室」の研究員を募集しています

市民科学研究室は平成20年度の「子どもゆめ基金」の助成を受けることが決まりました(子ども向け教材開発・普及活動成)。今後1年をかけて、これまで行ってきた「子ども料理科学教室」のプログラム開発を継続し、完成させることになります。そのための研究員(有償)を募集しています。食育と科学に関心があり、何らかの経験をお持ちの方はぜひお問い合わせください。

また、「子ども料理科学教室」の出前授業も続々と申し込みが入ってきています。

こちらもいつでもお問い合わせ下さい。

★6月:成城学園初等学校にて、文京区立駒本小学校にて

★8月:「東京ガス横浜ショールーム料理教室」にて

YouTubeで
子ども料理科学教室の
プロモーションビデオが
ご覧になれます。



<http://jp.youtube.com/watch?v=9mEFC1Z4HOU>

babycom mook No.4

『これからの電磁波対策』が発刊されました

書店おきしない販売で1万部以上が売れた babycom mook vol.1『電磁波』。今回の vol.4 はその対策編というべき内容で、ヨーロッパなどの最新の動向が詳しく紹介されています。市民科学研究室の上田は全体の監修と一部執筆を担当しています。ベビーコム (tel.03-5475-5563) や市民科学研究室で販売しています。amazon.com でも買えます。



市民科学研究室とは

市民科学研究室は次の3つのことがらを促進するNPO法人です。

1. 科学技術にかかわる様々な意思決定や政策形成への市民参加
2. 様々な社会問題の解決に向けた専門知の適正な活用
3. "持続可能で生き生きとした生活"を実現するための科学研究や教育の実践

市民の問題認識力を高めるための講座や勉強会を運営し、市民が主体となった調査研究や政策提言や支援事業をすすめています。"リビングサイエンス"(生活を基点にした科学技術)という概念を手がかりに様々な角度から「生活者にとってよりよい科学技術とは」を考えそのアイデアを実現していこうとしています。

あなたも会員になりませんか

どなたでもいつでも入会ができます。次の3つのサービスを提供いたします。

- ①月刊「市民科学」で紹介された記事や論文の全文をホームページからダウンロードできます。
- ②毎月行われる「市民科学講座」の資料をダウンロードできます。
- ③年に2回、「市民科学」で紹介された主要記事・論文をまとめた『市民科学 セレクション』(80ページ)が届けられます。

次の3種類の会員があります。

- ★ダーウィン会員……年会費3,000円 ①+②
- ★ファール会員……年会費6,000円 ①+②+③
- ★レイチェル会員……年会費10,000円 ①+②+③+講座費免除

詳しくはホームページをご覧ください。 <http://www.csij.org/>